

## 令和3年度 第1回 知事広聴「平太さんと語ろう」 記録

【日時】 令和3年11月18日（木）

午後1時30分～午後3時00分

【会場】 河津バガテル公園内 交流拠点施設

### 1 出席者

- ・ 発言者 東伊豆町・河津町において様々な分野で活躍中の方  
4名（男性2名、女性2名）

### 2 発言意見

番号	分野	項目	頁
発言者1	スポーツ	アクティビティの提供、トレイルの整備	3、16
2	農業	世界農業遺産「静岡水わさび」の継承	5、19
3	観光	観光振興、副業による地域振興	10、19
4	教育・観光	地域教育、旅モデルによる観光振興	12、17

【川勝知事】 皆様、こんにちは。川勝平太でございます。今日は、花々がとても美しい河津バガテル公園の中の素晴らしい建物の中で、河津町並びに東伊豆町の男女おひとりずつの方々からさまざまなことをお聞きするため、ここで開かれております。通常は、東伊豆町や河津町の町民の皆様方と意見交換を直接するものでございますが、残念ながら感染防止対策でできないということでございます。

私はこれまでの12年間、伊豆半島に200回近く足を運んでまいりました。本当に美しい所でございます、久しぶりにここに来られたのを大変喜んでおります。昨日来、移動知事室でこちらに来ておりまして、まず河津町に参りまして、川端康成の滞在した福田家、また今度統合されることになった河津町立西小学校に行きました。その小学校はわずか60数名しかいないんですけれども、「檜っ子」と言われるヒノキ、河津町の人たちがヒノキを大正4年に植えられて、そのヒノキを町の人が切って売って立派な校舎を建てられました。西小学校の子どもたちと一緒に過ごすことができましたが、一方で、本当に子どもたちが少なくなっていることを痛感しました。

ところが今、都会から抜け出たいという青年が増えていまして、昨日、今日と県外各地からお越しになっている青年たちと意見交換をする機会がございました。昨日の夕方から東伊豆町に入りまして、東伊豆町で最初に会った方が、東京から移住されてこちらの東伊豆町を心から愛してやまない建築家の方です。その方から、空き家を活用して、そこで仕事もでき、かつ町の人と一緒に付き合えることを満喫しているお話を承りました。今朝は天気もいいので、稲取のふれあいの森に参りました。標高239メートルのところに展望台があるんですが、その展望台から稲取漁港、向こうの伊豆の半島、伊豆の島々を眺望することができました。また、そこでドローンを飛ばしました。熱海の土石流災害がございましたけれども、事故のあった所には人間が危なくて行けないので、ドローンを使って事故現場をしっかりと把握しながら救援体制や復興に当たるということを経験することができました。

そして、稲取漁港には「こらっしえ」という面白い所があります。稲取はキンメで有名で、今日は「キンメのおにいさん」も来ていますけれども、そのキンメの他に朝獲れたものを売っています。町の魚屋さんだとおっしゃっているんですね。町に溶け込んだ稲取漁港の人たちの姿を見たわけです。そこで同じように果物などの農産物も売ってまして、近所のレディたちが農作物あるいは農産加工品、農業芸術品を売っている様子を見ました。

ですからここは、東京では味わえないような素晴らしい魅力を持っています。世界で最も美しい風景の画廊と川端康成が言われたこの美しい所で、デジタルやオンラインを活用して生活をしながら仕事もでき、しかも幸せな気持ちを持って仕事ができることをこれから発信していきたいと思います。岸田総理もデジタル田園都市国家構想を出されています。デジタルを使って田園都市、ガーデンシティ、ガーデンアイランドの中でどのようにしたら人々が感染症に怯えることなく、きれいな空気、おいしい食べ物、美しい景色を味わいながら幸せに生活できるか、仕事ができるかという時代を作っていきたいと強く思っております。そうしたご意見を聞いてそれを県政に生かしていきたい。

それから、これは聞きっぱなしではありません。仮にこの場で我々が答えられないものは、必ずその後確実にお答えを出すことによって、お聞きした事柄が無にならないようにするスタンスです。今日の広聴会は、私の意見を言うのではなくて、しっかりお聞きして、それを県政に、なにかんづく賀茂地域の発展に活かしていきたいという思いであります。しばらくの時間、どうぞよろしくお付き合いくださいますようお願い申し上げます。

**【発言者1】** こんにちは。発言者1と申します。実は大分県の出身でして、妻が河津の人で、結婚を機にこちらに移住しまして10年くらい経ったところです。みんなからクララと呼ばれておりますので、ぜひ今日は伊豆のクララとして覚えて帰ってもらえればと思いますので、よろしくお願ひします。

僕はこの河津バガテル公園の中で、「KURA-RUN OUTDOORS」という名前の店を運営しています。この店は大きく3つのアクティビティを提供していますが、1つはキャニオニングと言います。キャニオニングは、滝がたくさんある川へ行きまして、その滝へ飛び込んだり、ウォータースライダーのように滑り降りたり、ロープを使って降りて行ったり、滝をどんどん下っていく遊びで夏にぴったりのアクティビティです。2つ目はボルダリングで、東京オリンピックでも話題になりましたスポーツクライミングの中の1つです。うちのお店には4.3メートルの高さの壁がありまして、その人工の壁を登って楽しむことができます。昨年11月に伊豆半島南部では初めてのクライミング施設としてオープンして、今月でちょうど1年たったところです。3つ目はけん玉です。今ここにもありますが、けん玉は皆さん御存知の昔ながらのおもちゃですけれども、とても奥が深く面白いですね。もちろん、うちのお店でもけん玉の販売と指導をしています。

僕は「伊豆けん玉クラブ」というクラブを立ち上げまして、地域の皆さんとけん玉を楽しんでいると同時に、指導と、けん玉の先生としての活動もしています。

お店としては3つのアクティビティがメインなんですが、個人としては伊豆半島ジオパークのジオガイドとしてトレッキングのガイドをしたり、トレイルランニングという山道を走るスポーツのガイドやレースの運営の仕事をしたり、シーカヤックやサイクリングのガイドをすることもあります。そんなふうに伊豆半島の海、山、川を全部使って遊びながら仕事をしているんですが、その中で感じたことを少しお話しさせてもらえればと思います。

伊豆半島には遊歩道、登山道がたくさんあります。それらをトレイルと英語でまとめて言いますが、トレイルはいい所がいっぱいあるんですが、残念ながらその全てがきれいに整備されて、いい状態に保たれている訳ではありません。僕は伊豆半島中のトレイルを走ったり歩いたりしてきましたが、もう少しメンテナンスした方がいい場所がたくさんあります。例えば、人が歩くと道はだんだんへこんでいきます。そのへこみがだんだん溝のように深くなっていく場合があります。人が歩いて踏み固められ、また水が流れ、それを繰り返していくうちにだんだん溝が深くなって歩きにくくなっていきます。場所によっては人の身長ぐらいまで壁が左右にできて、深くなってしまった溝を歩く登山道もあります。歩きにくくなった登山道はどうなるかと言いますと、登山者はその道の外側を歩くようになります。外側を歩けば当然その場所もまた削られて、溝がどんどん広がっていきます。あるいは溝が歩きにくいので全然違う場所を歩いて、新しい場所に道ができたりもします。そうやって複数の道ができたり道が広がっていくと、草花が生えにくくなって、ひいては道を含めて山の崩壊につながる場合があります。崩壊にまでなってしまうと、大規模な改修が必要になってお金も時間も必要になりますが、そうなる手前の段階でメンテナンスをしたいんです。ぜひしてほしいですね。伊豆半島のみならず、県内がそうだと思いますが、多くは国有林の中に静岡県と環境省が一緒になって登山道を作り、その登山道は国立公園の中にあって、管理を地元の市町、例えば河津町にお願いしている場合がよくあります。僕はトレイルランニングの仕事をする中で、登山道整備の仕事をすることもあります。その時の許可申請が面倒くさいんです。町、県、国に話をして許可申請をするわけですが、そういった申請の手続きをぜひ静岡県でもサポートをしてもらって、少し簡単になるとよりやりやすくなると思います。行政の方は忙しいので、僕らみたいな民間の団体ガイドやトレイルランニングの運営母体

が一緒になって整備をすれば、うまく役割分担ができていいのではないかと思います。人が必要な作業の時はボランティアさんを募って作業することも可能になります。石をどけたり、邪魔になっている木を切ったり、周りにある部材を使って階段を作ったり、水が流れやすい所に排水口を作ったり、以外と簡単な作業でメンテナンスができるんです。少し指導すればボランティアさんも一緒に作業ができるので、それほど費用をかけずに作業ができます。そういった民間の力を活用してトレイルの管理を一緒にしていけば、それほど費用をかけずにトレイルの寿命を延ばして、ひいては山の環境を整えていくことができると思うんです。そうやって行政と民間が一緒になったメンテナンスのシステムができあがれば、伊豆半島全体のトレイルの状態が良くなって、もっとたくさんトレイルを作ることができるかもしれません。伊豆半島の真ん中にある天城山などの高い山と、南伊豆の海岸線を通るきれいなトレイルとをつなぐ100キロ、200キロの長いロングトレイルを作ることができるかもしれません。ロングトレイルは日本各地にありまして、海外でも非常に人気のコンテンツですが、伊豆半島にもできれば、またいつか来るインバウンド需要にも対応できて、よりたくさんの方々に伊豆半島の自然を楽しんでもらえると思います。そうやって伊豆半島で、行政と民間が一緒になった登山道整備のソフト面と、新しいトレイルを作るハード面が両輪で揃えば、より魅力的な伊豆半島になると思います。ぜひ、川勝知事含めて県の方にもサポートをお願いしたいと思います。以上で僕の発言を終わります。

**【発言者2】** 皆様こんにちは。ただいま紹介していただきました、河津町大鍋から参りました、伊豆わさび食品チーフアシスタントの発言者2と申します。よろしくお願いいたします。

弊社従業員は家族を含めパート従業員と合わせて6名です。もともとは9代続く、屋号を東畑家と申しまして専門のわさび農家です。私の幼少の頃は、収穫したわさびは全て東京の卸売市場へ送る方法で経営をしておりました。今は亡き7代目の私の父親になります。約40年ぐらい前に家にあるわさびを使って加工品を作り、それを商品化して売ってみてはどうだろうかということで、母と2人で家にあるわさびを原料として手作りのわさび漬、わさび味噌、茎を使った三杯漬などいくつかの商品を考え出し、それを商品化することができました。これが伊豆わさび食品という名前の言われであります。その時から伊豆わさび食品という名前で加工品を商品化したということになります。

たくさんの方々のご縁をいただいて、地元のスーパーや売店に少しずつ少しずつ卸していくことで進めてきました。8代目になります私の夫は当時まだ公務員でしたが、この加工業は6次産業になるのではないかということで就農しました。市場に出せない少し傷があるわさびやちょっと黒いわさびが出るわけですが、それまで捨てていた茎や葉っぱの部分は原料として十分使えるので、今言われているSDGsにもつながると思います。その後、地元スーパーのみならず関西のスーパーのバイヤーさんにも目を留められて、関西のスーパーにも卸すことができるようになりました。ご縁がご縁を生むのは面白いもので、東京、神奈川、千葉の関東方面でも販売が可能になって、商品化が進みました。世界農業遺産「静岡水わさびの逸品」にも認められることができ大変ありがたく思っております。私たちが自信を持って作る商品が消費者の皆様の手元に届く、販売されていく様子はすごくパワーと勢いを感じて、やる気を出すことができました。

昨年になります、大学を卒業して5年ほど東京の卸売市場の営業の仕事をしておりました長男が就農することになり、9代目になりました。河津町で運営しておりますふるさと納税にも参画することができ、ネット販売への参入、念願であったInstagramも開設することができました。さらに、単品売りでなく生わさび、加工品、お米、かつお節などをセットで楽しめる商品を開発することができて充実してきました。今までは電話とファックスでしか対応できなかったことが大変拡大されたと感じています。これらの新規事業のおかげで、さらにまたご縁をいただいて進んでおります。

今後の弊社の目指す姿ですが、あくまでもわさび農家ということはずっと続けていきたい。父からの言い伝えでもある「わさびは水が命」を念頭に、JAや地元行政との連携を持ち、わさびを生産し、そのわさびを原料とした商品を皆様にお届けし、世界農業遺産「静岡水わさび」の継承に努めたい、それがこれからの方針であります。

ここで、次の世代へつなぐため、世界農業遺産「静岡水わさび」の継承に努めるためにお願いを2つほど言わせていただきたいと思います。まず1つ目ですが、これはあってはならないこと、災害です。人の力ではどうすることもできない天候や温暖化による気温の上昇、しかし来る時は来るのが災害だと思いますが、一番のマイナス要因になります。起きてしまった時の敏速な復旧、支援を県、国、町からぜひともお力添えをお願いしたいと思います。2つ目は、世界農業遺産「静岡水わさび」の継承に努めるUターン就農者自身への支援をお願いしたいと思います。災害の支援と通じるところもありますが、コロナへの支援は大変柔軟に対応していただき、経営継続などの支援に大変感謝

しております。しかし、Uターン就農者自身に対しての支援はなかなかハードルが高いようです。家業を拡大する気持ちで帰ってきてても直結した支援がありません。家業を絡めた異業種に挑戦するのであれば支援はあるようですが、いくつか当たってみました。弊社には難しいものが多いようでした。例えば、先代が使っていなかったほ場を新しくするために、直す時の労力への支援があったらいいと思います。新しい品種の苗を作りたい、品種改良したい時のハウスなどの施設について直接的な形で支援していただければ本当にありがたいと思います。

限界集落となってしまいました私の住む大鍋地区ですが、世界農業遺産「静岡水わさび」を作れる場所でもあるんです。ですのでまだまだ未来はあるんじゃないかなと思います。これからもできる限りの努力をして、河津町、伊豆にとどまらず県の東部・中部・西部とも連携し、全国そして世界へと、この素晴らしい世界農業遺産「静岡水わさび」を発信し続けたいと思っております。ご静聴ありがとうございました。

【川勝知事】 「クララ」こと発言者1さん、大分県から来ていただきましてありがとうございました。発言者1さんに会おうと思ったら、河津バガテル公園に来られました。公園自体には入園料がかかりますが、その券売所の向かいにあるのが発言者1さんのお店なんですね。ですから気軽にスポーツ万能の発言者1さんに会いに来られたらよろしい。やはり発言者1さんにとって最高の幸せは河津の女性に会ったことです。河津の女性が、この河津を中心にした伊豆半島の魅力を発言者1さんに気付かせることになったということです。ボルダリング、キャニオリング、トレイルランニング、まさにこの21世紀になって始まって、今やオリンピックの種目にもなったスポーツの実質リーダーですね。危ない所も登り方も知っている先生がここにいらっしゃって、教える教材は伊豆半島全部だというわけです。この伊豆半島全部を教材とする時に、その教材のダメなところを直さないといけない。例えばトレイルの道がだめになっていると、プロですからもどこが悪いかわかると。従って先生が気づかれたところを町、県、国が一緒になって直す制度が必要であると言われていたわけですね。そしてこの伊豆半島全体が世界の共有財産、すなわちジオパークなんですね。ジオサイトに行くためにはそれぞれの道がございますから、そういう道がダメージを受けていますと危険ですから、ジオサイトだけでなく伊豆半島全体が危険のない形で、また自然が痛めつけられないようにするのは公的な義務ではないかとおっしゃっているの、私は正論ではないかと思いました。

ではどういう形でこれができるのかということになりますと、町も県も限られた予算をどう使うかということになります。何しろここは世界の共有財産ですから、人類、社会のために国が責任の一端を担っているということで、特別な配慮が必要な地域という認識を国に持っていただくとなりますと、国、県、市町がそれぞれ応分の負担をしながら実際に活動されている方を支えることができるのではないかと思いますので、そういう方向で私は国に働きかけたいと思います。

ここが発言者2さんと通ずるところです。何しろわさびは世界農業遺産ですから、これを担っている人に対して、人間国宝になられた方々あるいは文化勲章あるいは文化功労者になられた方々に対しての支援体制と同じように、世界の宝物である伊豆半島のわさびを作っている人を支援しないと、水わさび自体がだめになるのではないかという、同じ発想じゃないかと思うんです。ただ、発言者2さんの面白いところは、ご主人様が8代目だということです。言い換えますと、將軍でいえば吉宗なんですね。8代將軍吉宗は末っ子にもかかわらず紀伊半島から將軍になられたわけです。どうも8代目を継がれた発言者2さんの旦那様はサラリーマンをされていて、世界農業遺産という動きがある中で文字通り7代目まで続いていたところを継がれたということで、8代目は少なくとも15代目まではつないでいかないと。今9代目のお坊ちゃんがいらっしゃるということです。河津のわさびに対する思いの深さは今充分にお聞きしました。

実は昨日、河津町立西小学校に参りまして4年生、5年生、6年生の子どもたちと一緒に歌を聴かせていただきました。3年生がこちらにいるからということで別室に案内されたんですよ。するとそこに10数名の3年生の男の子、女の子たちが割烹着を着て手袋をはめて、このぐらいの出刃包丁を持って控えているので危ないなと思ったら、そこに青年たちがいまして、みんな河津の方でした。テーブルに大体2人の子どもたちがいて、その青年たちがテーブルごとに1人ずつ立って、まずわさびの茎を5ミリに切りなさい、今度はわさびのところは1ミリぐらいに切りなさいと言うわけです。そしてそれをみじん切りにして、水を切って、最終的にわさび漬けを作りまして、パックまで青年たちが用意して、わさび漬けを持ち帰りました。実は、元副知事だった者が、そこで見よう見真似で小学校3年生と一緒に作って、パックに入れて持ち帰って、それを昨日県の幹部と一緒にいただいたわけですが、実によくできている。それぐらいのものを素人で昨日だけで作った。これは河津の青年のおかげであると思います。そういう青年がいることを知ったわけです。限界集落の所、水がとてもきれいな所を守らないといけない。



ほ場を修復したり新しい場所に作るのには初期投資が要りますので、それでお困りになっているのですから、継承するためにはそれなりの制度的な保障がないといけないということですね。ジオパークという観点から見れば伊豆半島全体が世界の共有財産、そして農業遺産という観点で見れば水わさびが世界の共有財産になっている。県が国へ申請をして、わさび農家の人たちが一緒にサポートしてくださった。みんなで一緒に作ったわけですから、みんなで責任を持って継承していくことが必要ではないかと思います。おふたりのおっしゃっていることは、分野は違いますが、一方は伊豆半島全体のスポーツ、一方は農業芸術品、工芸品を作っている、両方とも世界クラスだということですね。ここをスーパー特区か何かにしたらどうか。特区としていろいろな自由度があってそれなりの基金が積まれて、それをいろいろな形で活用できると。それは上から決めるのではなくて、それぞれの現場を最もよく知っている人たちの声が反映される形で、町あるいは県が間に入って有効に活用していくことができるのではないかと。

ちょっと話がずれるかもしれませんが、デジタル田園都市国家構想、つまり光ファイバーがあってオンラインで仕事さえできれば、田舎の美しい豊かな自然景観の中で、住みたいという人に住ませるようにするというのが岸田総理の大方針です。デジタル田園都市国家構想というのは、道路インフラ並びに情報インフラの2つさえあれば、日本全体が一極集中でなくてさまざまな所で、ガーデンシティ、ガーデンアイランドあるいはガーデンペニンシュラと言ってもいいと思いますけれども、こういう美しい所で住める国にしていきたいとおっしゃっているわけです。でも一気にできないでしょう。どこでできるかと。東京に近い所でやればいいと。

2020年にふるさと回帰支援センターが行った移住希望地ランキングでは、何と20代、30代、40代、50代、60代、70代以上の全ての年代において静岡県が第1位だったと。静岡県への移住相談が1万1千件以上ありました。これは過去最高でした。実際に移住を決めた人が1,390名以上で、1,400名近かった。その世帯主の年代は30代が最も多く、子育て世代の方、若い方なんです。お金がありません。したがってその方たちは支援を受けなければなかなか生活できないですよ。都会の生活をしてきた人が来られるので。家の中にオフィスを作るとか、東京的なライフスタイルを一部活用できるようにするには、少し家の改装もしなくちゃいけない。そういうことをすればデジタル田園都市のガーデンシティのモデルができる。そのモデル地区に伊豆半島や県東部は東京から一番近い所だからなれるんじゃないかと。私は約束しますが、数日後に全国知事会がウ

エブであるんですが、そこでこれを提案してみます。モデル地域を作ってほしい、例えば東京、首都圏から一番近い伊豆半島東部はどうですかと。今度はそう遠くない将来に首相官邸でフェイス・トゥ・フェイスの全国知事会も行われます。そこでもデジタル田園都市国家構想に関連して首相にご提言を申し上げます。実は日本が持つ世界の宝が伊豆半島には3つあるわけですね。もう1つ産業革命遺産群がありますが、世界文化遺産、世界農業遺産、ジオパークと3つもあるわけです。こうしたものに国としても責任を持ち、デジタル田園都市国家構想のモデルケースとして、まずは静岡県東部、伊豆半島を指定していただきたいと。とりあえず僕の力として要請することはできますので、それはお約束します。ただ実現できるかどうかは、みんなで力を合わせないと、またいろいろな方々のご了解を得なくてはなりません、そういう方向性で一緒に頑張りたいと思います。

9代目から15代目、将軍ではありませんけれども、発言者2さんには9代目がいらっしゃいますので、ぜひ8代目以降、ご主人、お坊ちやまからつながるように、我々も一緒に努力したいと思います。

**【発言者3】** こんにちは。東伊豆町の発言者3と申します。私は東伊豆町観光協会に所属しておりまして、神奈川県横浜市の出身で2年半前に移住してまいりました。もともと趣味でオートバイが好きで、いろいろな所に行って日本一周もしたんですけども、その中でも伊豆半島が一等思い出が強くこちらで働きたいなという思いがあって、2年半前に地域おこし協力隊などの面接を経て、結果的に東伊豆町観光協会で働いています。観光協会では若手の一兵卒ということで、電話の問合せ対応、メールの対応といったお客様の対応ですとか、イベント運営など、サラリーマンとしてあくせく働いております。たぶん皆様が一番突っ込みたいのがこの格好だと思うんですが、「キンメのおにいさん」という名前で、普段は土日がお休みなので、こういった格好をして、移住者ということもあって町の人に顔を覚えてもらいたい気持ちもあります。この格好だと顔というか、この形を覚えてもらうようになっているんですが。人に覚えてもらいたいのと、身ひとつで特産品のアピールをしたいというのがあって、これはキンメダイなんです。東伊豆町は「稲取キンメ」というブランドのキンメダイがありますので、そういったことをPRしたいです。昔は東伊豆町は稲取温泉や熱川温泉が有名だったんですが、今自分は28歳ですが、同世代から「何でキンメダイかぶってるの」とか「東伊豆ってど

こ」と言われることが多くて、PRになるんじゃないかなと思ってこういった格好をしています。これでパソコンを打っているわけじゃないんですが、イベントはこういった格好で働いています。「キンメのおにいさん」としては、隣の発言者4さんと一緒にYouTubeのチャンネルをやらせてもらって、動画化して新しい観光のPRを試してみたり、ローカルテレビにキンメダイの格好をして地元の住民向けに町のイベントをPRして番組にしてもらったり、それをまた別のテレビ局が共有して放送してもらったりして、こういった格好をしているおかげで今までと違ったいろいろな形でPRをする仕事につながっているのかなと思っています。一応、こういった面白おかしい格好なので、今度近隣の幼稚園で食育の授業をしてほしいと言われておりまして、こういった形で町の人の役に立ったり、こういったことができないかという相談を受けたりしています。やはり移住者としては声をかけてもらったり顔を覚えてもらおうと、すごく安心してお付き合いができます。自分は元の町から1人来て寂しいところもあるので、そういった意味でこういったことをしてよかったなと思っています。

冒頭に話したんですが、僕はオートバイが好きでこの伊豆半島に来まして、今観光協会の仕事に就いているんですが、今後は自分のオートバイで、やはり静岡県は二輪の産業もかなり特出していますし、先ほどから皆さんがおっしゃっているインバウンドの観光ですとか日帰り旅行ですとか、伊豆半島に休日に来られるとわかると思うんですけども、バイクの聖地みたいな形で、冬も路面が凍結せずに、本当にバイク乗りの人にとってはとてもいい土地です。そういったことを「キンメのおにいさん」、観光協会も含めて自分の人生でやっていければと思っています。

そんな私ですけれども、今日お話ししたいなと思ったのは、私みたいな観光協会の人間や役場に勤めている人間は、副職ができないんですね。役場に勤めていると人脈もできますし、専門的な知識も蓄えられますし、さまざまな技術が得られるんですが、役場、商工会、観光協会の人間は、今公務員でも副職が解禁されているケースもある中で、もっと自由に仕事をするのができないのかと普段思うことがあります。東伊豆町は人口が1万2千人ほどで、公務員含めその周りの関連組織を含めるとおそらく300人程度になりまして、そうすると100人に1人以上はもうそういった職に就いていることになります。そうすると1人が自分のやりたいことをやるだけで、町としてもかなりのパワーが出ると思うんですね。いろいろルールがあって厳しいことももちろんわかっているんですけども、何とか伊豆半島で自分の力を発揮して働けるルールを先進的に取り組め

れば、人口全体で減少している中で伊豆半島の1つの町が先進事例として取り組めたら、とても素晴らしいことなのかなと思います。ただこのあたりはいろいろなルールやしがらみがあると思います。移住者の若者ながら2年半で感じたところもあり、今回そういったご質問にいたしました。以上です。

【発言者4】 東伊豆町地域おこし協力隊の発言者4と申します。よろしくお願ひいたします。まずは自己紹介からさせていただきます。私は東京生まれ、東京育ちで2年半前にお隣の「キンメのおにいさん」、発言者3さんと同期という形でこちらの東伊豆に移住をいたしました。本業は音楽家で、メインは「うたのおねえさん」として実際に幼稚園や保育園に生演奏をお届けするという出張コンサートを行っています。小学校から国立音楽大学で音楽を専門に学びまして、同中学、高校、大学と進学し、卒業後はプロの演奏家として童謡やクラシック、ポップスと幅広いジャンルで活動し、そのかわりMCやレポーター、音楽講師のお仕事も行っていきます。

そんな私がなぜ東伊豆に移住をしたかといいますと、2018年より東伊豆のミス雛のつるし飾りという観光大使を務めさせていただいたことをきっかけに、地域の方との触れ合いやイベントへの参加を通して初めて観光という分野に携わり、今までは実際に自分がお客様としておもてなしを受けていた立場にあったのが、おもてなしをする側に立ったとき、この観光業の魅力にとりつかれて、この仕事を学びたいなという思いがあり、地域おこし協力隊としてこちらに移住してまいりました。協力隊としては観光促進、旅モデル、イベント企画運営、地域教育の分野にて活動しております。伊豆での生活はとても自然豊かで心も豊かに過ごしています。地域の魅力を掘り返そうというスローガンで畑活動をしている有志団体にも所属しておりまして、地域の魅力を掘り返そうという名前から「ほっくり隊」という有志団体になるんですけれども、その活動を通して週末は土に触れるという、東京での生活からは考えられないような自然の温かさに触れながら、日々新しい発見がやまない生活を送っております。

そして去年は、女性のキャリアや社会貢献を評価する大会、ビューティー・ジャパンの日本大会にて総合グランプリ、モスト・インフルエンス賞を受賞いたしました。今年も同大会の研修合宿の誘致が叶いまして、いわゆるインフルエンサーさん約40名の研修誘致を行い、町のPRに努めました。そして私が出場した時は東伊豆町の方々の応援が力となりまして、大会前後には壮行会、祝勝会を開いていただいて、約40名の方々が

越しくださり、町を挙げてのご声援あって受賞が叶いました。

本日は、数ある活動の中から、ビューティー・ジャパンでもテーマとした旅モデル、そして地域教育についてお話しさせていただきたいと思います。旅モデルとは私が作った造語になりまして、もともとは東京にいる頃から旅行が好きで、この伊豆半島にも元観光客としてたくさん足を運んできたんですけれども、景色だけのものより、同じ世代の女性がその地域で楽しんでいる写真、いわゆる駅に貼ってある旅行のポスターですね。同じ世代の人がその地域で楽しんでいる写真を見ることで、行ってみたいという気持ちが高まって旅行に出かけることが私も多く、そんな経験からこの伊豆という観光地で観光業に携わるようになりました。景色だけのPRよりも、実際に人がその地域で楽しんでいる姿こそ誘客心をかき立てるのではないかという自身の思いに基づいて、自身がモデルとなって実際に地域の魅力を伝えております。この活動は東伊豆町にとどまらず、じゃらんさん、伊豆箱根鉄道さんで起用していただくなど、伊豆半島全域で地域の魅力を伝えられるよう励んでおります。

そして、地域教育の分野では、移住者から見た地域の魅力や働き方について中学生、高校生をメインに講演を行ったり、子ども向けのイベント企画や運営を行っています。特に中学校、高校で行う講演では、生徒さんたちからフィードバックを実際にいただけるんですけれども、そこで最も印象に残っていることがあります。その生徒さんたちが、漠然と自分は東京に出ていくものだと思っていたけれども、一度自分の将来と向き合いたいと思った、自分のやりたいことは地元では叶えられないと、考えもせずに決めつけていた、できることなら残りたいけどその手段はないと思っていた、地元でできることを探したい、町のためになる仕事に就きたいという声がとても多く、誰かにレールを敷かれているわけではないのに、仕事は地元以外の所とするものという先入観、そして地元に残りたいという思いのある生徒がとても多かったです。実際は多いということです。このような若者の生の意見に触れ、私があつたらいいなと思う制度があります。それは地域おこし協力隊という制度が、地元の出身者の若者やUターン向けに設置されることです。自身の育った町でこんなことがしてみたい、一度外に出て培ったスキルを地元で活かしたい。最初の3年間安定したお給料がもらえる仕組みであれば、地元で挑戦することに不安を感じる若者のハードルを低くして、定住や、後の人口を増やす地域活性化につながるのではと考えております。私自身も自分の働き方が若者の可能性を広げる一助となるよう、この伊豆半島での講演活動や、「うたのおねえさん」であつたり、自身の

キャリアを通して精進して継続していきたいなと思っております。以上になります。ありがとうございました。

【川勝知事】 感心いたしました。河津のクララこと発言者1さんはお嫁さんとのご縁でこちらに来られたわけでございますけれども、「キンメのおにいさん」と「うたのおねえさん」はおふたりとも自らこちらに来られているということです。みんな見ている、「キンメのおにいさん」に来てほしいと、あるいは幼稚園の先生や保護者の方たちが「キンメのおにいさん」に来てもらうようにしてくださいと言われていたので、そういうところにお出になっている。しかし大事なことを言われているわけですね。観光協会の職員だと、そして東伊豆町は1万強の人口があると。こういう能力のある方が、実は東伊豆で観光協会の職員プラスアルファの仕事がしたいと、なぜできないのかと、もっともな疑問であると思います。そもそも役場の職員さんというのは、その昔いわゆる兼業農家の方たちがいらして、専業農家から兼業農家になって、その兼業農家は農業でも収入がある、役場に勤めて役場からも収入を得られるということは当たり前だったんじゃないでしょうか。だったらどうして観光協会の職員でありながら、もう一つ兼業ができないのか。おっしゃっていることが正論であると思いました。

それからもう1つすごく面白いと思いましたが、オートバイの聖地だと言われたことです。この方は横浜から来られましたが、横浜は信号がいっぱいですよ。何しろ横浜市だけで370万人以上いて、静岡県と一緒なんです。この方は今東伊豆にいらっしゃるんですが、河津にも面白い人、「つつけん」という人がいるんですよ。「つつけん」は面白い青年で、実際は有名な老舗の宿屋のお坊ちゃんなんですね。だけどそれを言うのは憚られるというので、実はオートバイマニアでたくさんのオートバイを持っておられて、あちこち行ってらっしゃるんですよ。しかも二輪車となれば静岡県です。何しろヤマハ発動機、ホンダ、スズキが作っているわけです。また、今はサイクリングでもマウンテンバイクがあつて、マウンテンバイクをやりたいけれども足腰が立たないという人はEバイクなどをやるわけですが、Eバイクも静岡県が一番たくさん作っているわけですよ。ですから、バイクの聖地というのはオートバイ並びにEバイクを含めてバイクの聖地なんですね。このバイクの聖地で、「つつけん」さんはインターネットでいろいろ発信をされているわけですよ。僕はオートバイの聖地と言われたときに、ひょっとしたら発言者3さんが「つつけん」の情報を得て来られたのかと思ったら、どうも

違うらしい。ですから独自にオートバイ……あっ、「つつけん」が来た。

(「つつけん」登場)

「つつけん」は、ご紹介申し上げましたとおり、有名な宿屋の若旦那ですけれども、別の顔は「つつけん」です。実は東伊豆の「キンメのおにいさん」も隠れた姿はオートバイマニアで、オートバイの聖地だとおっしゃっているわけですね。そういうことがございまして、ここがオートバイの方たちにとってすごく大事な所だということです。この情報はバイクマニアにもっと知ってほしいと思った次第です。先ほどの兼業のお話は、そういうことを考えている職場の人がいるとすれば、伊豆半島においては全て認めると。東伊豆町だけ認めると、河津町は、南伊豆町は、下田市は、西伊豆町は、松崎町はということになりますから、まずは賀茂地域では全部認める。そういうふうにして兼業可能な職種を、少しずつ小さな扉を開いて広げていく。そして新しい仕事をしていくようにしてはどうかと思った次第です。

それから、「うたのおねえさん」こと発言者4さん、優秀な人です。ミス雛のつるし飾りでミスになられて、ビューティー・ジャパンのグランプリ、しかも国立音楽大学でずっとやってきた本当の専門家じゃないですか。大変な方がここにいらっしゃいます。昨日も今日もそうですけれども、青年たちがこちらの地域に惚れ込んでいるんですね。こちらに入ってくると若者が自由にできる、この魅力がすごいとおっしゃっていました。そして今お話を聞けば発言者4さんも同じことをおっしゃっている。

しかもとても大切なことをおっしゃいました。それはこちらの東伊豆町、河津町、賀茂地域で暮らしている人たちの暮らし、それ自体が幸福であると、幸せな暮らし方をしているということが、実は引きつける一番の基礎になるとおっしゃったわけですね。同時にもう1つ、暮らしている若い青年たちがこちらで仕事をするものじゃない、都会に行行って仕事をするものだという先入観を持っていると。これは先入観であって正しい考えではないということに「うたのおねえさん」もすぐに気付いて、地域おこし協力隊は国の制度で3年間は生活に困らないように支給しているのを、地域の出身者を優先的すれば、都会でいろいろ経験したことが3年間こちらで活かせるし、実際はこちらで仕事があるし、こちらでの生活の方が自由度が高い、自分の思ったことを実現できる可能性がこちらの方が高いということがわかるはずだという提言は、国に対してなされるぐらい重要な提言です。ですから、通常はこの河津町なり東伊豆町で働きたい方を全国から募集して県外から来られる。しかし県内で、しかもその土地の方に優先的にして

あげることを考えたかどうか。これは今ある地域おこし協力隊を否定するのではなくて、それと合わせて賀茂のような地域におきましては、帰りたいと思っている青年は特別枠で3年間帰ってきて、そこでいろいろと見聞をしながら次のことを考える時間を与えると。3年間というのは「石の上にも三年」と言いますけれども十分な時間です。ですから極めて重要な提言で、これをぜひ実現したいと、実現するべきではないかと。なぜかという先入観が間違っているからです。帰りたいけれども仕事がないんじゃないかと。実は違うと。高校を卒業して都会に出た時にいったい何を知っているでしょうか。自宅と学校との往復とクラブ活動での情報ぐらいでしょう。あるいは両親の仕事を知っていても地域全体の仕事についてはほとんど知らないですよ。ですから、ないと思っている先入観をもう一回ひっくり返すためにも、地元出身者のUターン優先を今ある枠組みプラスアルファのところでやってみる、まず地域でやってみてください。そうすればいきなり制度を全部ひっくり返すことにならないでやりやすいかなと思います。おふたりとも、副業の提言あるいは地域おこし協力隊の活用法をご経験に基づきながら、やはり文字通り都会っ子ですよ。横浜の浜っこさんと東京のお嬢様と、そういう方がこの自然の中でいろいろやることはあると、いかにこれが幸福な仕事か皆さん知っていますかということをおっしゃっているわけですね。貴重なご提言をお聞きしたと思った次第です。「キンメのおにいさん」、「うたのおねえさん」、ありがとうございました。

【発言者1】 皆さんのお話を聞いて思ったことを少し話させてもらえればと思います。今、発言者2さんがUターンで息子さんが帰ってこられた、発言者4さんも発言者3さんも若者の仕事の話、Uターンの話をされていましたがけれども、僕、実は出身は大分県のものすごい山の中で、大鍋よりもさらに田舎なんです。田舎自慢したら負けなぐらいの田舎でして、言ってみれば田舎から田舎に移住してきたんですけれども、田舎の人間が外に出たいと思うのは当然のことで、出てもいいと思うんですよ。やはり今おっしゃったように、戻ってくる場所をぜひ用意してあげられたらいいなと思うんですね。当たり前のように外に出て仕事をするとおっしゃっていましたがけれども、同年代のお父さんに聞くと、自分の子どもにぜひ自分の仕事を継いでくれという話はあまりしていないんですね。ぜひ、自分の仕事は面白いからお前もやれよという一言を言っておけば、どこか大学へ行った後のタイミングで、親父があんなこと言っていたなと思いついて戻ってくるかもしれない。なのに皆さん、地元のお父さん、お母さんは自分の



仕事をしてくれとは言わないんですよ。いろいろ辛いことの方を思い出さと思うんですけども、自分の仕事は楽しいんだよという話を自分のお子さんにしてあげれば、きっと子どもたちは戻ってくるはずなんですね。それをしていなかったために、こんなふうにうろうろとよその地域に行ってしまうわけなんですから、そんなことがないように、ぜひ世の中のお父さん、お母さんは自分の仕事の素晴らしさを自分のお子さんに伝えてあげてもらえたらなど、僕は今話を聞いて思いました。以上です。

【発言者4】今の発言者1さんのお話にもあったんですけども、私も、賀茂地域局の方に、賀茂地域の子どもたちへの将来の仕事についてのアンケート結果を見せていただいたことがあります。子どもたちもそうですけれども、何より保護者の回答が印象深く、保護者の方も自分の住んでいる地域に子どもたちが活躍する場所がない、活躍する場所がないから外に行くことを勧めるというアンケート結果を拝見しました。その時にこの地域の大人がここに生まれ育った子どもたちの可能性を諦めていることにすごくショックを受けました。活躍できる場所がないという決めつけもそうなんですけれども、そもそも活躍する場所というのは子どもたち自身がその場所で築いていくものなので、その築き上げ方であったり、やはりこの自然いっぱいの中で育った子どもたちの可能性は本当に無限大だだと思いますし、自然の中でパワーを存分に浴びて過ごしてきた力は、やはりこの地方で暮らす子どもたちの強みでもあります。子どもたちの力を伸ばしていく、活躍する場所、活躍の仕方というところで、大人がどんどんアドバイスじゃないですけども、そういった力を与えることによって、やはりどんどん可能性も広がっていくと思います。私は講演を通して、どうやったらこの地域で活躍できて、自分のしたいことを叶えていけるのかという、一つの手段というところでも、これからも子どもたち、若い世代に話をしていけたらなと思いました。ありがとうございます。

【川勝知事】ご両者とも似たようなことをおっしゃっているんですね。まず、地元のお父さん、お母さん世代の方が自分の生き方に自信、誇りを持っていることを子どもに伝えることがすごく大事だということですね。お父さんの背中を見て、またお母さんの言っていたことをどこかで覚えていますから、あまり否定的なことを地域について言うと、それが将来思わぬ損失になりかねないということがあります。もうひとつ重要なことがあります。それは発言者1さんがおっしゃったんですけども、高校を卒業するな

り、10代後半ぐらいになると外に出たくなるのは当たり前だろうと。お父さん、お母さんは子どもが外に出るときに足を引っ張らないで「出ておいで」と言うおおらかさが大事で、外を見てきて帰ってきた時のことをちゃんと地域が準備していることが合わせて大事です。それはそうでしょう。1回は地域の外を見てみたいと、それは少年であれ少女であれ10代ぐらいからはいろいろな夢があるから外へ行った方がいいと。実は我々県では、「30歳になったら静岡県！」という運動をしております。30歳前後までは失敗があり得ると、こんなはずじゃなかったということがあり得る。しかも今は終身雇用が当たり前ではなくなっています。かつてはいったん勤めたらずっとそこで宮仕えしなくてはいけない。それがそうではなくて転職するのも当たり前になっていることを受けまして、30代前半くらいまでは就業していらっしゃいと、戻ってこられる場所があることを前もって知らせておくと。お気付きかどうかは知りませんが、高校を卒業するときにはパスポートという小さなカードを配りまして、そこにアクセスすれば静岡県情報が常に手に入ることになっています。これが功を奏して、静岡県民の方だけが戻ってこればいいのではなくて、30歳になったらこちらでこんなにたくさん面白い仕事があるということを知らせることをやっているわけですね。戻ってきたときには経験を積んでいますから、本物として戻ってくるわけですよ。そういう方がお父さん、お母さんになったら、戻ってきたときに本当に根付くと思いますね。発言者2さんのお坊ちゃんが戻ってこられて今度は本気でしょう。ご主人様も奥様に惹かれて就農された時も本気でしょう。だから1回いろいろな経験をするのは大きく寛容の精神で認めてあげればいいと。しかし40歳前後になったらもう自己責任です。そのときには、僕は私はこれで生きるということを決めればいい。長い100年の人生でありますから、30代前半くらいまでは出ていってもかまわんぐらいの。この伊豆半島は海に開かれ、陸にも開かれている地域性を持った所です。もともと津々浦々でいろいろな人が来られて、港ですからしけにあつたらそこでしばらく休まなくちゃいけない。だからある意味でよそ者がいつも一緒ですから排他的ではないんですね。そういうところがある地域性なので、出ていくのはいいと。そしてまた戻ってこられるように、よく戻ってきたと、良かったなという地域になるのがいいということでもあります。発言者1さんも発言者4さんもおっしゃいましたけれども、ともあれ大人がこの地域に対してあまりマイナスのことを子どもたちに植えつけるようなことは慎みましょうというのには正論であると思いました。ありがとうございました。

【発言者3】 最近地元の人と遊ぶことが増えてきました。発言者1さんのボルダリングを皆さんと楽しませてもらったり、最近サーフィンを始めたり、天城山の山登りを始めたりしています。住んでみると余裕が出るので、普段の観光の一步先の観光ができるようになってきて、伊豆半島は本当に豊かな所だというのが移住してさらによくわかってきました。自分の仕事は観光協会ですが、1泊2日の観光だとやはり伊豆半島の本当の奥深さに気付くのがなかなか難しいなと思うところもあります。ワーケーションのお客さんのような長期滞在のお客さんが今増えてきているんですけども、そういった方は、例えばダイビングに友達を連れて来て、ダイビングの資格を取るのには1人5万円ぐらいかかるんですが、1人が5人ぐらい連れて来てくれたりします。そういった姿を見て、今は流行りでワーケーションがあるかもしれないんですけども、こちらで仕事をしていて本当に楽しいという人を今、このチャンスに確保していくことが大事だなと感じる日々がありました。

【発言者2】 私の家は昨年、長男が帰ってきました。よそから移住されてきた方々、それはもう大歓迎、本当にありがたいことだと思うんですけども、さっきからおっしゃっているように、やはりここで生まれ育った子どもたちが大人になって戻ってこられる町が理想だと思うんですね。何があったら帰ってきてくれるのかなと考えると、移住の方々に対してある程度の保障は確立されているけれども、たとえ帰ってきても、帰ってきたって何にもないと終わってしまわないで、何か少しだけでもいいから帰ってきたことに対して、例えば帰ってきたという証明があれば何かの税金が少しだけ安くなるとか、そういうのがあれば、帰ってその分頑張ってみようかという気持ちになる人も中にはいるんじゃないかなと思います。このコロナ禍の状況なので、さっきおっしゃったワーケーションで、外から中からの雰囲気明るくするためのワーケーションで仕事をこちらへ持ってきて、そして遊ぶ、それも一番理想の形だと思うんですね。とにかく、ここで生まれ育った人たちが戻ってくれる町をつくるための何かいい策を行政の方でもぜひ、1つでも2つでも考えていただけたらなと思います。

【川勝知事】 私、「30歳になったら静岡県！」と言いましたけれども、発言者2さんのところのお坊ちゃまはいくつで帰っていらっしゃったんですか。

【発言者2】 今、29歳です。

【川勝知事】 なるほど。その年齢なんですね。30歳前後になりますと、実は人生の転機を迎えます。昔から「十五にして学に志す」「三十にして立つ」と言うんですね。「四十にして惑わず」「五十にして天命を知る」。30歳前後になりますと、女性でも男性でも結婚相手、パートナーと出会ったりする可能性が高くなって、その時何を考えるかという故郷の父や母のことです。それからパートナーの父や母のことです。ご挨拶に行かなくちゃいけないし、またご挨拶に来てもらわないといけないということがありますよね。その時に父や母のことを必ず考える年代が30歳前後だと思います。それまではお父さん、お母さんとは関係なく、自分の好きなことをやって、結婚あるいは仕事の転機があったときに父母はこれからどうするんだろう、自分はどうかということを考える。個性は違いますけれども、与えられた寿命というのはだいたい100歳ぐらいで、30歳前後になったら父や母のことを考えざるを得ないような時期が来ます。ですからお父さん、お母さんが子どもの時に言っていることや、地域の大人が言っていることが大事だと僕は思っているわけですね。それが「30歳になったら静岡県！」を展開してかなり成功している理由だと思っています。それから、戻ってきた時の特典みたいなものは、「30歳になったら静岡県！」の運動の中に上手に組み込めればいいかなと思います。

それから、そもそも30歳前後だとお金はないですよ。家を買うあるいは子育てをするには大変お金がかかりますから、仮に住居を替えるとなれば大変な決断が必要です。実はこれはたまたまやってみたことなんですけれども、ちょうど数カ月前、こちらに移ってくる若い人が多くなっていて、じゃあどうしようかということで、こちらで空き家があってもコンピュータを使って仕事ができるような家がほとんどないんだったら、そういう場所、ワーキングスペースを作りたいということであれば、35万円を県の方で出しますと。そしてそれに県産材、例えば伊豆の材木を使って作ってくだされば、さらに14万円プラスしますと。そしてさらに空き家に小さな庭があると、今までコンクリートのアパートやマンションに住んでいたのが、ちょっとした庭があると、こういう綺麗なバラはともかくも、キュウリを植えたいとかトマトやジャガイモを作りたい、その場合には15万円プラスしますと。そうすると35万円足す14万円足す15万円ですから64万円なんです。1カ月もたたないうちに、用意した5,600件が全部はけました。ですからそういう需要があったということなんです。空き家があるから住んでちょうだいと

言っても、改装しないとこのままじゃ住めないと言うに違いないので、そういうところにお金をかけることが成功しました。今、県が次の本格的な予算を組む時に、こうした予算をもう少し増やして、戻ってきた時に東京での仕事も続けてできるような空間を作る、プラスアルファ庭づくりです。元県民でなくてもいろいろな人がお越しになって、パートナーと一緒に来られたり、昔旅行して好きだからここに来たいと言う人にも、誰にも平等に若い青年たちを援助するということです。実は8軒に1軒ぐらいは空き家です。私を見た感じは、東伊豆町でも相当な空き家があるみたいで、都会の人から見ると魅力的なわけですね。改装している現場を見せてもらいました。改装するのに大工さんがいます。それから左官屋さんがいます。それは地元の人なんですよ。地元の人が、家はこういうように造ると思っていたのが、都会の感覚で全然違う空間に生まれ変わるわけですね。左官屋さんも今までやっているように単に壁を塗るだけじゃなくて全然違う感じになるわけです。これはもうめくるめくような体験です。県あるいは町としては、税金をどのように有効に活用するかという、平等でなくてはならないので、どなたにも差別をしないでみんなが幸せになれるようにという意味で、今は外国人の方もいますから、県外の人だけじゃなくていろいろな人に対しても一切差別しないで、ここだと開かれた生活ができますよ。ただし発言者2さんのような所はお祭りもあったり、地域のコミュニティの行事や何かがあるでしょう。そうしたことについてちゃんと理解をしてもらった上で来ないといけない。先ほど発言者4さんがおっしゃったのは、3年間ぐらい猶予をもって本当に好きになったらいなさいよと。その間の生活は地域おこし協力隊のような形で保障することにしておくと、県外の方にも県出身の方にも皆さんに活用していただけると。いずれにしても今日はそれぞれ切実な、それぞれのご経験から出てきたご提言でございました。答えられる形ですぐに答えられるものと、ちょっと時間がかかるものがあるかもしれませんが、いずれもきっちりと対応しなくてはいけないご提言であったと承りました。どうもありがとうございました。